

のに、なんで新聞

Vol. 1

MAMAS START

母親発赤ちゃん学事始め

ひとりの母親が思うこと——
それは、本当は、その人ひとりに
起ったことじゃない。

ここで自分の子育てを語るのは、
どんなに勇気がいったことだろう。

読んだらあなたの声も聴かせて欲しい——

子どものこと
をかわいいと思
えない時がある。
出産のとき、分
娩が大変すぎて、
生まれたばかり
の子を胸の上に
ちよんと置かれ
ても、期待してい
た感動はなく、
「あー、やっと終
わった」としか
感じなかった。
子どもとの生
活が始まって、
産後の体はすぐ
に回復せず、初め
での新生児につ
きあうには、予想
もしていない過
酷さがあった。産
んだ者の責任と
して、世話をし
ていたように思う。

赤ちゃんの写真を毎日撮ったり
成長の記録を残したりしていた
が、この子のことを心から愛お
しくは思っていない：そう思え
ない自分が、母親としてちよつ
とおかしいのではないかと思っ
たこともあった。

その息子は5歳になった。腕
白で外向的な息子が、ときどき
甘えて、ベタベタくっついてく
るとき、イラつとする。なんで
もつと優しく受け入れられない
のか。この子を心から愛してい
ないからではないか。そう思っ
て辛くなる。

息子が3歳のときに次男が生
まれて、こちらはとてもかわい
いと思える。

「この違いは何なんだ?!」
長男には申し訳ない気持ちがい
っぱいである。この子は私のこ
とをどう思っているのだろうか。
私が怖い形相でひどく叱ってし
まうとき、この子を責め立てて

か。いつもは私のことをどう思
っているのだろうか…。
子どもの気持ちをもつと知り
たい。子どもと真つ直ぐ向き合
っていきたい。

ココから始まると信じてる、
私のママズスタート。(Nou)

私が母親になって、もう4年。
娘が生まれてから今まで、子
どもとのやり取りを大変だと思
うことが数多くあった。そして
その大変は、娘の成長の時期に
起きていることだと気づくのは
いつも後で、娘がひとつ越えた
頃に私が登りは
じめるというペ
ースが続いてい
たと思う。

そして、今。二
人は将来、母娘と
してだけではな
く、どうやってど
んな関係を築い
ていくのだろうか
かと想像すると
ワクワクする。そ
して同時に、今こ
の時、この子との
関係づくりのタ
ーニングポイン
トであり、私のマ

ママズスタートだ
と感ずる。
4歳の娘。好奇
心いっぱい真

つすぐな眼差しで私のことも見
ていると思う。どう映る私なん
だろう。「母親だからきつと遊ん
でくれるはず!」と声をかけら
れるのではなく、「この人と遊ぶ
と面白いんだ!」と娘に選ばれ
て誘われる私でありたいな。そ
う思うようになった私は、ちよ
つと変わり始めていた。どうな
らうか。私を見せたいか考
えている。子どもたちは、ひと
を信じて生きるチカラと、まだ
まだ世間はワクワクすること
でいっぱいなんだと感ずる。こ
れからを生

私たちが母親にしか発見できなかったこと—
今度はライブで、あなたと一緒に考えたい

来る 2011 年 10 月 1 日(土)13:30~16:00
ラフレさいたまにて(要申し込み)
よみうり子育て応援団@さいたま

「なぜ泣くの?赤ちゃんと学ぶ子育て」
主催:読売新聞社・NPO 法人彩の子ネットワーク

「のに、なんで」の法則って、知ってる?

あなたの子育てのタイヘンや、日常にある〇〇
のタイヘンを声に、言葉に、するところから…
社会の見方が180度変わる—そのタイヘンは、
あなただけの問題じゃないよ…

きて欲しいと願う。
私のママズスタートから20年
後は、どんな二人になっ
ていくのか。
(Asayou)

みて!みて!みて!



さき:「飛行機に乗りたいなー」
私:「飛行機でどこに行きたいの?」
さき:「アカチャンホンポ!」
私:「難しいんじゃない?停められないよ」
さき:「じゃあ・うどん屋さん!!」
私:「(あれ?同じに無理じゃん)」

さき:「お空に近いお店じゃないと行けないの?」

子どもってそういう想像力なんだな—素敵だ
なと思って。つい、顔がほころんだ。
私は、そんな近場なの??じじ(祖父)の家とか
じゃないんだと思ってたり、そんなところには飛
行機は着陸できないとかそんなこと思っていた
んだな—。

(写真) 左:やえがしさき 右:やえがしゆうこ

何が私を動かしたのか？

人と話すのは苦手で、つきあうのも面倒だと思っていた私が、長年、夢未来に参加しているなんて今でも信じられない！

振り返ると、自分の「困った」を解決したいという気持ちや自分の疑問「これって私だけが思っているの？」を色々な人に聴きたい、一緒に考えたいと思ったところがいつも出発点で、それが自分を動かす原動力。

私だけじゃなかった：

性的ことを子どもたちに伝えるってどういうことだろう？と考えている人との出会いから、自分の身体やパートナーとの関係・ジェンダーの問題と色々な事が知りたくなり、専門家に話を聴きに行った。

自分の疑問を周りのママ達に聴いてみたら、実はそれってみんなが声にしたこととはなかったけど知りたかった事だとわかり、座談会や学習会を開く動きにもつながった。

専門家の中にも様々な考え方があった。教わるだけでなく、まず自分で考えてみる！というおもしろさを知った。

こども☆夢☆未来フェスティバルって…

オリジナルな

わたしを生きたい

行動展示で有名な北海道の旭山動物園は、自分たちの価値観の範囲内だけで動物を知るのではなく、動物の側に立ってみることで動物たちへの見方や価値観が変わっていったほしいと願いをこめて始めたことが話題になっていった。

同じ頃9歳の息子が「皆と同じようにできない自分がつらい」と言葉にした。

私はこの子をどんなふうにするか？知っているだろうか？と思った。子どもが社会でやっていけるようにと、私が一定のものさしを勝手に作り、そこから外れないように周りの目を気にして育てようとしていた。もっと思いきり生きたいよという子どもを苦しませていた。

子どものためによかれと思つて育てるのではなく、どんなふうに生きたいその子なのか、ぶつかったり悩んだり喜んだりしながら一緒に探していききたい。そして誰もがつかない時には「つかない」と声に出せる関係や、そう言った人をひとりにならないネットワークが欲しいと思つた。

どの子どもこれからの未来を思いきり可能性いっぱい生きてほしいと願つて夢未来2007のテーマとして提案し、ゲストに坂東元氏（現園長）を迎えた。

一緒につくるっておもしろい！

埼玉に鉄道博物館があるのにどうして鉄道のテーマルームがなかったの？鉄道好きの私はテーマルームを作りたくなった。どんな部屋にしたい？どんな人と創るとおもしろい？と実行委員会でも話が盛り上がった。

こんなふうにして私にとっての夢未来のおもしろさは、自分だけの気づきだと思つていたことが誰かに声を伝える事で共感してくれる人が見つかったこと、一緒にやるうよと言つてくれる人がいたこと、そこから、また新たな関係やつながりが広がったこと。

そして、子育てのことから始まつて様々な地域活動・社会貢献活動をしている企業などたくさんの人たちと一緒につくっていくおもしろさを知り、自分の知らない私にも出会えたこと。

今年の夢未来と一緒につくりませんか？ココであななのやりたい事ができるよ！何ができるだろ…と探している人も、実行委員会で一緒に話そう。

(たけな)

あなたとの出会いを楽しみにしています！

こども☆夢未来☆フェスティバル2012

2012年3月4日(日)

埼玉県県民活動総合センター

～フェスティバル実行委員会～

2011年10月2日(日) 13:30～

同会場・第1会議室 保育要申込

2011年11月12日(土) 13:30～

同会場 305室 保育要申込



みんなの声から
『新しい』が生まれるって
うれしいな

利用者さんや、地域の方々と一緒につくってきた「子育て支援センターさいのこ」が、今年9月で開館5周年を迎え、9月10日に熱気にあふれる記念イベントを行いました。

このイベントも実行委員を募り、子どもだけでなく大人も夢中になる、みんなが主役になれた楽しい日をつくることができました。(どんな一日だったかは写真←をみてね！)

当日は、さいたま市清水市長、見沼区奥富区長ほか、沢山の方々がお祝いして下さいました。

5年の間には、利用者さんがデザインしたオリジナルキャラクターや手遊びも生まれ、今年の「さいのこセミナー」では、「子どものステキと私のイライラ」をテーマに、子育てのエピソードを出し合ったところから、「の、なんで」の法則に気づく大きな発見がありました。そして、自分たちの発見を伝える絵本づくりも始まっています。

これからも、子どもも大人も嬉しくなる、みんなの声から新しい何か生まれていく「さいのこ」…未来に向かってGO！

(関昌星)

「ひとり親になった時、この子をひとり育てていかなきゃ。」って思ってた。ものすごい不安感に襲われ辛くなった。子どもが、どこかでなにか問題と言われる行動を起こせば、「私のせいになっちゃった。」って自分を責めたことが何度もあった。だけど、ひとり親になることを選んだわけじゃない。その時は、そうすることでしか、生きられなかったんだ。

「ひとり親で子育てなんかできないよ」、「ひとり親だからって、変な目で見られながら生きていくなんて悲しい」、「自信をもって私らしく生きたい」・・・その思いからみんなで一緒に楽しむ

日曜開館のひとコマ「今、これがしたい！」 ～トコちゃん(2歳)とブーさんのかき氷～



ブーさんのかき氷機が気に入ってたトコちゃん。ずっと、くるくる回して遊んでいた。さあ、みんなでかき氷をしよう！ってなったけど、ブーさんのかき氷機は自分で持っていたいんだって。周りの子は、「それがなきゃ出来ないんだよ！」って言って、トコちゃんから取ろうとするんだけど、「やだ～っ！！」って言ってなかなか手離せない。

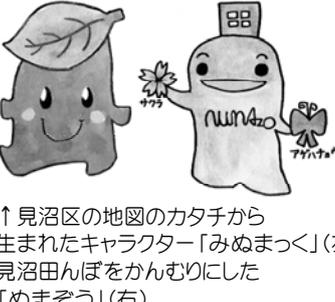


悲しくて大泣きするトコちゃん。「今は自分で持っていたいんだよ」って周りの子達に声かけたけど、納得してもらえなくて、かき氷機は無理やり持って行かれてしまった。それでもひとしきり泣いた後、目に涙を溜めながら、みんなでかき氷を作って食べました。(写真・文 にしかわみほ)

日曜開館の日に、ひとり親のサロンをやりたいって思った。私と同じひとり親の人はどんな気持ちでいるんだろうって思った。会って、話したかった。本当に人が来るのか、できるのか不安があったけど、彩の子の仲間が駅の掲示板上にポスターを貼る交渉してくれたり、いろんな人に声をかけたりして、当日を迎えることができた。日曜開館には50人以上の方が来て、B B Qを楽しんだ。そしてサロンに参加してくれた方がいて、その出会いが、本当にうれしくて、うれしくて。サロンを企画した私自身が、自分の話しをすることが不安だった。

だから、当日足を運んでくれた、そのことを思うとそれだけで胸がいっぱいになった。サロンでは、話そうとする、涙が出てしまつて、言葉にならないことも沢山あったけど、震えながらも話せたことや涙を流すことができてよかった。そんな場所が今までなかったからここからはじまる。ここからはじめる...その日の出会いを大切に、今後は、出会った人と一緒に楽しい日曜開館とひとり親のサロンの場所をつくることをやっていきたい。(Tobe)

9月25日の日曜開館「炭火焼きさんま食べて、ほっこり秋しようよ...」のさんまや解体ショーの鮮魚は、さいたまコープニッツ宮店さんにご協力いただきました。本当にありがとうございます。



↑見沼区の地図のカタチから生まれたキャラクター「みぬまっく」(左)見沼たんぽをかんむりにした「ぬまぞう」(右)



←さいのこのから生まれた手遊び「なりたいな」お〜きくなったらなりたいな♪シャキーン!!



こ〜んなにたくさんの人と5周年をお祝いしました！5年間で何人来たんだろう？

みんなが主役☆未来へ向かってGO! さいのこの5周年!

もちよい動物園 inさいのこ



←ナマズ、ザリガニ、金魚たちが大集合!

↓坂田さん家のウコックイとひよこのゴマちゃんも来たよ



手のひら動物園もやったよ〜!



↑新聞紙プールで大興奮!! み〜んなで思いっきりあそんだよ!



←5年間の思い出を記念誌にしたよ!

↓みんなが主役の手遊びタイム一人ひとりの笑顔がステキ☆



→金魚と人間のたつき

それは、赤ちゃんの泣き声から始まった：

今やれることを、やるんだ。

—子どもが生まれた時、自分の意思とは関係なく、

毎日が押し寄せてきた—

震災であたりまえの生活から放り出された

人々の「大変」を思った……………

鈴木玲子

3月15日の読売新聞の朝刊に、

気仙沼で百人が海水の中のビル3階に避難し、3日後に救出されるまでの様子を書いた記事があった。その中に読売新聞の記者がいて、記事は3日間の様子をルポしたもので、2日目のこと、『子どもが夜に「のど渴いた」「もう帰りたい」と泣くと、「うるさい」とつぶやく男性もおり、びりびりした雰囲気』という箇所があった。

それを読んだ私は、その子の親はいたたまれない気持ちになったのではないだろうかと思っただ。海の中の3階にいて、そう言われても、その場から立ち去ることはできない。親が泣いてほしくないと思っていたって、子どもは泣きたいときは泣く。異常な事態、緊張の中、子どももどんなにか不安だろう。子どもが泣くたびに、親は小さくなくて、子どもの口をふさぎたく

なっているのではないか。

子どもは未熟だから、言っていることと悪いことがわからな。親が子どもに教えるべきことをやっていない。という私たちの社会の持っている子育てと子どもへの厳しい見方を感じた。

「のど渴いた」という子どもの声は、見方を変えたら、ほっとできる声だったのではないかなと思っただ。泣いたり、何かを言えるってことは、その子が生きていっていることだから。それに子どもは、「そうか、のど渴いたよね」って応えてくれる声が聞きたくて、言っているようにも思うから。

3月21日に予定していた「子ども夢未来フェスティバル」は中止になった。ポスターやチラシを配布した機関へ中止の連絡をし終わった16日の10時半頃、私は、「さいたまスーパーアリーナが気になっているんだ」と、



双葉町から移動中の南相馬市、津波のあと(3/12)

彩の子ネット事務所をつぶやいた。被災者を4千人受け入れるとテレビで報道されていた。気仙沼での記事から、さいたまスーパーアリーナに来た子どもたちは、どんな状況になるのだろうかと気になっていた。

「行かないと後悔するから、行ってください」とメンバーが言った。埼玉県のHPをみたら、県社協がボランティアを受け入れると書いてあり、電話をしてみたら誰も出ない。とにかく行ってみようと、駅に向かった。

アリーナに着いて、勝手に入ってしまったのだろうかと思いつつ、Bゲートの扉を開けてみた。被災者が到着したら受付をするテーブルがあり、その

向こうには、すでに毛布を敷いてそこに住み始めている被災者たちが見えた。

ちようど、そこに到着した女性がいいた。赤いフリースを着てリュックを背負ってる。受付をした彼女に話しかけてみた。「どこから来たのですか」「無事についてよかったです」と言ったら、彼女は涙になった。私は思わず彼女の肩を抱いた。

県社協の職員の顔が見え、その日の午後1時から、ボランティアセンターを立ち上げる会合を開くという声があがった。ボランティアをみて彩の子ネットの私にここにいなければ、赤ちゃんや子どもへの視点は抜けてしまうだろうと、後にはひけないと思っただ。(次号へつづく)



避難所となった、さいたまスーパーアリーナ(3/28)

写真：柚原秀康さん(双葉町)

編集後記

中泉 理奈

ひとりの母親が、自分のことを話そうとして、涙を流した—その涙を見た人が、「涙は社会的発言の第一歩です。」と、その涙を受け止めた。それが彩の子ネットのはじまりだった—言葉にならない声を発言と捉えてもらえることが、これまであったのだろうか。

私(たち)には、こんなに「思い」があるのに、なんでこの「思い」は届かないのだろうか：どうしたら届くの？

最後の編集会議、私はたくさん涙を流した。その涙を言葉に、声に、したいと思っただ。

私は、みんなの大切な「気持ち」や「思い」をこの新聞で、社会に伝えていきたい。

次号では、「子どもと一緒に活動する」母の葛藤を伝えたい。
「ご意見・ご感想をお寄せください。また、掲載希望記事もお持ちしております。(掲載要相談)

「のに、なんで新聞」
平成23年9月21日発行 隔月発行 vol.1
編集人：中泉理奈
発行人：鈴木玲子
発行所：NPO 法人彩の子ネットワーク
〒362-0017
埼玉県上尾市二ツ宮 1156-3
TEL：048-770-5272 FAX：048-770-5270
E-mail：office@sainoko.net
HP：http://www.sainoko.net/